
悪しき銭、苦く闘いて

曾口十土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪しき銭、苦く闘いて

【Nコード】

N2138N

【作者名】

曾口十土

【あらすじ】

王都グルジュにはさまざまな人種が暮らしている。雲上人のような王族から高慢ちきな貴族たち、信じられないほどの金貨を稼ぐ大商人あたりを筆頭にして、下はその日暮らしの日雇い人夫やら強盗殺人なんでもござれの凶徒ども。

混沌たる街の中で、女金貸しのジゼルもまた暮らしていた。金の余った貴族や商人から元手を借り、それを人々に貸し出して日々の糧を得ていた。ある夜、ジゼルは薄汚れた少年と出会う。その時から、冷徹な金貸しの仮面をかぶっていたはずのジゼルの心に、微妙な狂

いが生じてしまう。

序章に代えて　ゝある夜のジゼルの商売　前編ゝ（前書き）

この連載を始めるにあたり、敬愛する某なろう作家の方に強く背中を押していただきました。

冒頭を借りて感謝を述べさせていただきます。

序章に代えて　ゝある夜のジゼルの商売　前編ゝ

「払えない？」

つぶやいたジゼルの瞳が底冷えのする光を放った。蜜蝋に灯った炎がゆらりと揺れて、無表情な顔に影が躍る。

テーブルの向かいに座った三十半ばの男が、怯えたように小太りの顔をそらせた。

ジゼルは無言。「どういうこと？」などとは問わない。震えながらも、ともかくこの男は金貸しに向かつて「金は返せない」と言っただ。

つまりは修羅場ということだ。いまこの場が。

それにしても、とジゼルは心の中だけで頬を歪める。とつぷりと日が暮れてからの呼び出しに応じてみれば、愚にもつかない話を聞かされたものだ。

別にジゼルは金があり余っているからこの男に貸し与えたのではない。富裕な者を金主として金を引っ張り、それに利子を上乘せして貸し出している。ジゼルは利ざやで食っているのだ。金が無い、で済まされてはたちまちジゼルの懐から火が吹き上がる。

「……隊商が山賊に襲われて、荷は残らず奪われたんだ。交易は失敗した」

沈黙に耐えかねたように男が言った。

ジゼルはまったく表情を浮かべず、小さく鼻で笑った。さも重大な告白のようにこの男は言うが、そんなことは先刻承知だ。街の暗闇に根を下ろしていれば、種々の情報は耳に入ってくる。遠く国境を越えた街で玻璃細工を買い集めたこの男の隊商が賊の手に落ちた。そんな不穏な噂をジゼルは昨日のうちに掴んでいた。さてどのように金策をするつもりなのか。そう思っただけで男の出方をうかがってみると、この有様だった。

「保険金があるだろう。隊商の出発の前に公証人も交えて保険の契

約をしただろうが」

「……保険は掛けていない」
「なに？」

初めてジゼルが表情を歪めた。目が合った男は頬を引きつらせ、いつそう顔を青くする。

大の男が女の一瞥で震え上がる。ずいぶんと滑稽だが、ジゼルにはもう慣れたことだった。

もともとは端正な顔立ちをしている。丸みを帯びた頬は東方渡りの白磁のように滑らかで、唇は桜の実のようにぷくりと朱い。愛らしさの中にも二十五歳に相応しい色香を感じさせる、なかなかの美貌といえた。

ただし、馬手側から見れば、の話だ。正面からジゼルの顔を見た者は、ぎよつとして身構えるかあわてて目を逸らすか、だいたいそのどちらかだ。

ジゼルの左頬から目元にかけて、燃え盛る炎を押し当てたような赤い入れ墨が無残にも刻まれているのだ。禍々しい刻印がジゼルの顔を実質以上に悪辣な相に作り変えていた。

ジゼルは赤い筋がまわりつく左目をすぐめて男をにらんだ。

「保険金も商品の買い付けにあてたんだ」

目をそらしたまま、絞り出すように男が言う。

（公証人も保険屋も抱き込んで謀りやがったな、このクソ野郎が）
目の前で証書として交わされた乳白色の羊皮紙を思い出し、ジゼルは思いつきり舌打ちした。が、いまさら悔やんだところで仕方がない。たとえ詐欺まがいのおざとい手段でも、騙されるほうに用心が足りなかったのだ。少なくとも、ジゼルが生きるこの街区はそういう世界だった。

「まさかそのまま知らんぷり、なんてことはないんだろう？」

押し殺したジゼルの声が殺風景な部屋に響く。二人が対面するテーブルの他には、わずかな調度品があるばかり。遠隔地交易に名乗りを上げた商人の住居にしては、ずいぶんと素っ気ない。

「じつは女房と子どもはすでに親戚のところに逃がしてある。おれもすぐに街を出るつもりだ」

ぴくりとジゼルの肩が震えた。

「むろん、荷馬車を手配した馬借やら買い付けをした商館やらの売掛は放っておく。両替商や他の金貸しからの借金もだ。だが……」

男がようやく顔を上げた。血の気が失せた頬のあたりに疲れを感じさせる。だが、その目に奇妙な硬い光が宿っていた。

「ジゼルさん、あんただけは別だ。あんたを放ってはおけない」

そう言って、男は懷を探った。ジゼルは表情を緩めることなく男を見やる。

殊勝な心掛けだ、とジゼルは思った。

この男はもともと近隣の農村で仕入れた麦をこの街で売る、零細な穀物商だった。それがここ数年で財を蓄え力をつけて、国境をまたいだ交易の販路に割り込んできた。この男から交易の元手にと借財を申し込まれたとき、ジゼルは男の将来に期待する気持ちも手伝って快く金貨百枚を貸し与えた。そのことを恩に感じているのだろう。

こんな客ばかりだと金貸しも楽なのに、と思わず微笑みが顔に出そうになる。

懷から取り出した男の手に短剣が握られていた。

気付かれないほどかすかに、ジゼルは目を細めた。柄頭に鷹を模した銀飾りをはめ込んだ、ちよつと洒落た感じの短剣だった。安物ではなさそうだったが、ジゼルの見立てではせいぜいが金貨五枚くらい。借金を贖うには到底間に合いそうもなかった。

あるいは鞘に収められたその剣身によほどの価値があるのかもしれない。そう思ったジゼルが口を開きかけた、その時にだった。

男が物も言わずに短剣の鞘を払った。椅子を蹴って立ち上がり、鋭く尖った剣先をジゼルに向ける。

部屋の空気が大きく動いた。蠟燭の炎が揺れて、厚刃の剣身が不気味に煌めく。

「他の借金取りは国外にでも逃げれば追ってこないだろう。だが、あんたは違う。客がどんなに遠くに逃げて、あんたは追ってくる。追い詰めたおれからすべてを剥ぎ取って、あんたは金を取り立てるはずだ」

ジゼルは平静を装いつつ、抜き身の短剣を見つめた。

「あんたはヤバイ人だ、ジゼルさん。だから、街を出る前にきちんと決着をつけていく。二度とおれを追うことができないように」

もはや男の体は震えていない。両眼から針のように細く、危険な光がこぼれた。

蛇やサソリのごとく恐れ嫌われるのなら、金貸しとしては満足するべきなのかもしれない。ただ、命と引き換えにというのはあれば、やや勘定が合わない、か。ジゼルは細く息を吐きながら、そんなことを考えた。

叫びをあげながら男がテーブルに飛び乗った。そのまま短剣を振りかざし襲いかかる。ジゼルは座った椅子ごと背後に身を投げた。宙に流れた琥珀色の髪が数本、白刃に斬り飛ばされた。

派手な音をたてて、椅子が床を転がる。後ろに転がって跳ね起きるジゼル。

いったん殺意を爆発させると、あとは止まることがなかった。男の顔はすでに商人のものではない。殺人鬼の凄まじい形相と化していた。

(……セヴリア)

ジゼルは胸の奥でつぶやいた。

短剣が一閃する。上衣の袖口が斜めに斬り裂かれる。

(早く来い、セヴリア！ あたしが死んだら、あんたの金蔵もからっ風が吹くんだろうが)

唖り狂った叫びをあげながら、なおも男は凶刃を振るった。ジゼルが床を這うようにして、あるいは壁を転がりながら、短剣から身を逃す。

生きた心地はまったくしなかった。

蝋燭が一本灯っただけの薄い暗がりの中で、男の短剣が獲物をついばむ鴉の嘴のように襲いかかってくる。間一髪でかわしながら、ジゼルは目を走らせた。

部屋の出入り口の扉は門がかかっている。外そうとすれば男に背を向けることになり、一突きに刺されるだろう。窓も戸が下ろしてある。少しでももたつけば、やはり白刃の餌食になる。

とつさに武器になりそうなもの……、それすらない。夜逃げ直前の男の部屋は掃いたようにきれいに整理されていて、テーブルと椅子それに筆笥が一つあるだけだった。明かりを灯す燭台も壁に据え付けてあり、手に持つことはできない。

「死んでくれ、ジゼルさん。おれが商人として再起するには、それしかない」

橙色に灯火を照り返す刃の向こうで、熱に浮かされた男の瞳が爛々と輝いた。まるで飢えた山犬と向かいあっているようだ。ジゼルの背中にも控えめな胸の間にも、冷えた汗が粘りついてに流れていく。体の内側が空洞にでもなったかのように、鼓動がうるさく響きまわる。

（この男、頭に血が上って短剣を振り回すだけだから、いまはなんとか助かってる……）

だが、空いた左手で掴みかかって来たら。

胸を一突きされる幻影を見て、ジゼルの胸がひときわ大きく鳴った。左右の手でバラバラに攻められると、さばききる余裕はない。

男がじりと迫ってくる。ジゼルは我知らず後ろに退いた。固い木壁が背中に押し当たり、ジゼルがびくりと身を固めた。

狂人のような叫びがジゼルを圧倒する。

壁を背にして動きが止まったジゼルに、男が猛然と短剣を突きかかった。にわかに体を退くこともできず、ジゼルは血が凍りつくのを感じた。

それでもなんとか体をひねり、短剣を左脇にそらす。体の真横を通り抜けた短剣へと、ジゼルは夢中でしがみついた。

男が乱暴に腕を振る。力くらべの格好になつてしまうと、女のジゼルはいかにも分が悪かった。軽々と男に振り回され、テーブルの角に体を打ちつけられる。痛みが体中を走り抜けたが、それでもジゼルは手を放すことはできない。爪がくい込むほどに強く、男の手首を握りしめた。

その時、部屋の扉が外から慌ただしく叩かれた。

「おい、開ける！ ジゼル、中にいるのか？」

よく通る男の声に、ジゼルは歓喜の表情を浮かべた。

「遅い、セヴリア！ あんた、あたしを見殺しにする気か」

「悪い。女房殿が屋敷にいと、おれも気楽に夜歩きできなくてな」とぼけたような声が扉越しに聞こえた。

みしり、と扉がきしんだ。扉の外からセヴリアと呼ばれた男が、木戸に体当たりをしているのだ。みるみるうちに門が歪み、四度目の衝撃で扉は半ば破れるようにして弾け飛んだ。

けたたましい音とともにセヴリアが部屋に転がり込んだ。腰の長剣はすでに抜き払っていて、白い剣身が薄闇に妖しく光る。

セヴリアはジゼルと組み合う商人の男を見つけると、迷わず剣を走らせた。

悲鳴をもらしながら、商人の男がジゼルの手を振りほどいた。死神の鎌のようなセヴリアの剣を逃れて、床を転がる。

男の顔は唇まで青で塗り込められていた。機を失ったことを悟ると、男は窓に走った。肩からぶち当たって雨戸ごと窓を破ると、庭を走り去った。

部屋が静けさを取り戻してから、ようやくジゼルはまとまった息を吐き出した。体中から汗が吹き出し、力が抜けてへたり込みそうになる。ともあれ、危機は脱したようだった。

ジゼルは長剣を悠然と鞘に収めるセヴリアを見上げた。

歳は四十を少し過ぎたあたり。けっして背は高くないが、胸は厚く腕も太い。髪は赤い巻き毛で同色の強い髭をたくわえる。両肩を隠す黒色の上衣をまとうて腰に長剣を吊るす姿が、いかにも騎士貴

族然としていた。ただ、貴公子と呼ぶには野性味がきつい。俗っぽく狡猾そうな目の光が災いしているのかもしれない。

「惜しいことをしたな、ジゼル」

そう言つとセヴリアは、供に連れた老僕から受け取つた手巾で顔を拭つた。

「あの男を逃がしたのか？ あんたがもつと早く来てくれれば、他にやりようもあつただけだね」

「悪い悪い。一昨日から珍しく女房殿が領地から街に上がつて来ていてな。忍び出るにも苦労した」

セヴリアが屈託なく笑う。

「まあ、いいさ。生きてさえいれば、取り立てる手はいくらでもある」

商人の男が恐れていたことに間違いはない。たとえ国境を越えようと、自治都市に逃げ込もうとも、追い詰める自信がジゼルにはあった。生きることは、世の中に絶えず痕跡を残すことでもある。野兎の糞のわずかな匂いを嗅ぎ分けて巢穴を探り当てる狐のように、獲物を狩り出すのだ。金貸しとして五年の歳月を重ねるうちに、ジゼルはそうした手腕を身につけていた。

セヴリアはジゼルの金主の一人である。逃げ去つた商人の男に貸し与えた金貨百枚は、セヴリアから引つ張つたものだった。男を逃げ出せば取り立てに手間取る、そう危惧したジゼルはこの部屋に来る前に人を走らせて、セヴリアを呼び寄せていわば用心棒代わりにしようと考えたのだ。

まだ動悸の激しい胸に、ジゼルは掌を押し当てた。あと少しでもセヴリアが遅れていたら、この部屋で冷たく転がっていたかもしれない。ジゼルはいまごろになって、体が震えてくるような気がした。しばらく呼吸を整えてから、ジゼルは住居の検分を始めた。

商人の住居はやはりもぬけの殻だ。さきほどの応接の部屋の他に、居間と寝室それに炊事場があつたが、金になりそうな物はすでに運び去られたらしい。粗末な家具や調度の類がわずかに残されている

ばかり。目方はかりが大きくて値打ちの少なそうな品々を、ジゼルは冷たい目つきで眺めた。この住居も確かどこぞの貴族から借り受けたものだったはず。借金のかたに差し押さえることもできない。

一通り調べ終わると、ジゼルたちは住居を後にした。

序章に代えて　　ある夜のジゼルの商売　後編

春の柔らかな空気が頬を流れる。真円に近い月の縁がわずかにかすみ、草木の芽吹く香しい気配が夜風に混じった。暗闇がわだかまる通りに、一行の足音だけがひたひたと響く。

最後尾を歩く老僕は表情も無く、ずっと黙ったままだ。妻子持ちの主人が夜間に若い女性と会う、そんな秘め事でもいささかも他に漏らさない寡黙さと忠実さが見てとれた。

「奥方様は壮健で？」

ジゼルが外套の奥に隠した顔で尋ねた。

「ああ、元気だ。だがこのところ淑やかさが影をひそめ、代わりに脂肪ばかり増えてな。少しばかり持て余している。やはり瑞々しい女の方が可愛げがあるな」

セヴリアの声色にわずかに媚びるような響きが混ざる。セヴリアが何を求めているか、察しないではなかった。だがジゼルは頬にかかるフードを被り直し、黙殺した。

ふと、歩くジゼルが目を止めた。

通り沿い、石積みの家屋の壁際に誰かが座り込んでいた。小さくちぢこまって、膝を抱えている。手に持った淡黄色の花の束が、闇の中でぼんやりと浮かび上がっていた。人影は眠っているように動かなかったが、ジゼルたちの足音に気づくと顔を上げた。

束の間、ジゼルと目が合った。垢じみた服に薄汚れた髪、まだ幼さが残る顔も土埃にまみれていた。乞食の少女だろうか、痩せた顔立ちが痛々しい。

少女はジゼルを認めると、ゆっくりと立ち上がった。それからふらつきながら近寄るつてくると、歩みを止めたジゼルにおずおずと花束を差し出した。

「……あの」

消え入りそうな声でつぶやく。

「どうしたの、お嬢ちゃん？」

少女が花束を持った手を押し下げて、戸惑ったように見えた。

「……僕は男です」

小さな声が潤いを欠いた唇から漏れ出る。意外に思ってたジゼルはまじまじと少年を見た。

月明かりに照らされると、なるほど顔つきに少年らしい固さがあった。だが目鼻立ちは整っていて、少女と見間違うのも無理はない。黒ずんだ髪は金の輝きを内に宿していて、瞳は闇に光る銀貨のように蒼い。まだ大人になりきれない細い体つきで、十三、四歳といったところだろうか。

「花を、買って貰えませんか？」

再び少年は手を差し伸べる。小さな手で可憐な里竜胆がいくつも花を咲かせていた。

ジゼルがフードの奥ですつと目を細めた。胸の奥底に沈めたはずの記憶を、薄黄色の花がかすかに触れた。

それは小さな村の風景。ジゼルの生まれ育った山沿いの貧しい集落の記憶だった。

ジゼルがまだこの少年と同じくらいの少女の頃、将来を誓い合った少年から貰った贈り物が、里竜胆の花束だった。寒村の暮らしは、この街とは比べものにならない。食べ物が無い、着る物が無い、住居もなんとか風雨がしのげる程度のくたびれたものだった。村人みんなで助け合いながら、どうにか厳しい冬に餓死者を出さずにすむ。そんなぎりぎりの暮らしの中で許された贅沢をと、ジゼルに里竜胆の花束を手向けてくれた。

あの時と同じほのかな甘い香りに、ジゼルの胸の内が揺れた。そっと吐く息の中に、郷愁と慕情の入り混じったかすかな熱が含まれている。

「いくら？」

問いかけた声が、柄にもなく感傷の響きを持っていた。血も涙も金貨で推し量る金貸しにしては、ずいぶんと不用意な感じがして、

ジゼルは決まり悪そうにフードの中の顔をしかめた。

乞食少年がぱちくりと目を見開いた。心底驚いた顔をしている。おそらくこの往来で少年は、空きつ腹を抱えて一日中花を売り歩いたに違いない。道行く大人たちに無視され、邪険に追い払われて、途方に暮れているうちに日が落ちたのだろう。当たり前の話だ。みすばらしい乞食からしおれかかった花を買う物好きなど、この街にいやしない。

「じゃあ……小銀貨二枚で」

ジゼルがあきれたように笑う。

「それじゃあパン一個しか買えないだろう。いいかい坊や、客が先に『買う』って言うてるんだ。こういう時はふっかけるんだよ」

言いながらジゼルは懷を探った。言ったことを理解したのかしなののか、少年は曖昧な表情のまま首を傾げていた。

あの時花を贈ってくれた少年もこんな顔をしていたのだろうか。

古い井戸の水を汲み上げるように、ジゼルは胸の奥を探った。だが、どうしても目の前の少年の顔にあの時の光景が重ならなかった。故郷の景色はいくらでも胸をよぎる。雪解けの冷たい水をたたえる小川、谷間のわずかな土地を拓いた畑、雪帽子を被った遠くの峰。

それでもあの婚約者の少年の顔が、どうしても浮かんでこない。

どんな優しい目でジゼルを眺めたのか、どんな穏やかな表情でジゼルに笑いかけたのか、すべては忘却の彼方に追いやられて薄墨の衣をまとったようにぼやけている。

無理もない。もう十年以上も前の思い出だ。

あの頃のジゼルは太陽と土の匂いの中に生きていた。それがいまでは街の暗闇を住み処とする金貸し、それも左頬に入れ墨をこしらえた悪相持ちだ。落ちた、とは思わない。ただ幸せの幾分かを、二度と戻ることのない故郷に捨ててきたのだ。

指先が財布を探り当てたところで、ジゼルは手を止めた。邪気のなさそうな乞食少年の顔を見つめたまま、フードの中で薄く笑う。

胸の内にちよっとした悪戯心が湧き起こっていた。

（あたしの左半面を見たら、この子はどんな顔するだろう）

大人の男でさえ目をそらす風貌だ。女の子みたいに優しげな顔をしたこの少年が見たら、悲鳴をあげるかもしれない。里竜胆の花束も放り出して、逃げ去ってしまうかもしれない。

ジゼルの顔により陰湿な笑みが広がった。

（ふふ……、汚塵にまみれたあたしには似合いだ）

そすればあの婚約者の幻影も、胸の中から消え去ってしまうにはずだ。ジゼルの心が暗い炎に翳る。

ジゼルの細い手がフードにかかる。ぱさりと音がして、艶っぽさと毒々しさが同居した顔があらわになる。

明るい月の光が向い合う二人を照らした。

少年がかすかに息を飲む気配が伝わってきた。

ジゼルの瞳が冷たく光る。屈折した愉悦と、かすかな失望。そんな感情が頭の中を埋め尽くしていくような気がした。

少年は動かない。

小さく息を飲んだ唇は薄く開かれたまま、一言ももらさない。蒼い瞳が月明かりを映し込んだように輝いて、ジゼルの目を見返した。真っ直ぐで混じりつけのない、澄んだ視線だ。商人連中のようにジゼルを値踏みしようとするでもない。腹を探ろうとするでもない。どこか憧れが含まれたような目で、一心にジゼルを見上げてくるのだ。

ジゼルはうつたえて、思わず少年から目をそらした。好奇の目にさらされることには慣れている。にらみつけられることにも、怯えた目を向けられることにも。だけど、こんなにも透き通った目でみつめられたことはなかった。固い殻に鎧われた心に、するりと入り込まれたように感じた。

さきほどまでの暗い感情は、跡形もなく消し飛んでいた。心に生じた空白に、娘らしい羞恥が膨れ上がる。何かをこらえるようにジゼルは口元をへの字に引き結んだ。体が震えた。

いまさらながらに、醜く入れ墨の施された半面をさらしたこと後

悔していた。手を上げて顔を隠したい衝動に駆られたが、ジゼルの体は金縛りにあつたように動かない。

ジゼルは完全に我を忘れていた。

だから、気づかなかつた。路地裏から黒い影がするりと這い出てきたことに。

影は風のように動いて、ジゼルに忍び寄つた。闇の中で銀が閃いた。

「ジゼル！」

背後から呼ぶセヴリアの声で、ようやくジゼルは我に返つた。目に狂気の光をたたえた男が眼前に迫る。手には月光を照り返す白刃が握られていた。

さきほどの商人の男だ。逃げ去つたように見せかけて近くに潜み、ジゼルを狙う機会をうかがっていたに違いない。

——殺られる。

虚を突かれたジゼルは覚悟した。山犬に飛びかかれた狐のように、身動き一つできない。

馬鹿みたいに口を開けて、ジゼルはただ死を待った。冷酷無比であるべき金貸しが、似合わない感傷になんかひたるからだ。けれど、そんな自嘲でさえも、一瞬の後には闇に沈んでしまふだろう。

視界の隅で、ぱつと里竜胆の花束が散つた。薄黄色の像がジゼルの目の奥に残る。故郷の暖かな幻を伴つた色だ。最期にそんな幻影を見せたのは、天の配剤かもしれない。ジゼルはぼんやりとそんなことを思った。

抱きつかれるようにして両腕を掴まれた。とつさにジゼルは身を固める。

見れば、ジゼルの体を掴んだのは乞食少年だった。花束を捨て、ジゼルをかばうようにして身を躍らせたのだ。

一瞬の後に、少年の体を刺し貫く衝撃がジゼルに伝わった。

少年とジゼルが同時に悲鳴をあげた。肩口を刺された少年は、苦悶の表情できつく目を閉じる。腕を掴んでいた力が抜けて、ジゼル

の腕をすり抜けて地面に崩れ落ちた。

長剣を抜いたセヴリアが吠えた。

素早く踏み込むと下から剣をすり上げて、突き出した男の腕を払う。男が獣のような声をあげた。半ば千切れかかった腕が、肘からよじれて宙を舞う。

「駄目だ！ セヴリア、殺すな！」

いくらか冷静さを取り戻したジゼルが叫ぶ。死んでしまったら、それっきりだ。借金も露と消える。

セヴリアはジゼルの言葉に反応しなかった。振り上げた剣を迷わず斜めに斬り下ろす。剣先が鎖骨に食い込み、胸を割った。葡萄酒を詰めた革袋を破り捨てるように、男の体が鮮血を散らしながら転がる。二、三度痙攣したかと思うと、男の体はそれっきり動かなかった。

ジゼルが絶望に呻いた。

生きてさえいれば、どうにでもなった。時間はかかったとしても金は回収できたはずだ。最悪、完済できないにしても、金貨百枚に相当する働きをさせることはできたはずだ。

だが死んでしまつては、それ以上先がない。借金の証文はただの紙切れと化す。たとえ逃げた妻子を見つけ出したとしても、「もう主人とは関係ない」と突っぱねられるとどうしようもない。

ジゼルの生きる道においては、死はもつとも忌避すべきことだった。死は異界への逃亡であり、借金の絶対的な踏み倒しだ。

血の匂いをまとつて、セヴリアの顔は昂奮に歪んでいる。野獣のようなその顔を、ジゼルは唇を噛みながらにらんだ。

騎士という人種はいつもそうだ。名誉だ義理だ体面だと言い放つては、いとも簡単に人を殺める。領地から上がる租税でこのうと暮らしているから、そんな短慮な人間ができあがるんだ。市井に暮らしていれば、人を殺して回つたつて小銀貨一枚にもなりはしないことはすぐに分かりそうなものののに。

「セヴリア、あんた……！」

文句の一つでも言ってやろうとジゼルは口を開いたが、言葉は途中で遮られた。

血に酔ったような顔のまま近づいてきたセヴリアが、いきなりジゼルの肩に腕を回した。力任せに引き寄せられ、ジゼルは抗うこともできない。ジゼルは逃げる間もなく、セヴリアに唇をふさがれた人を斬った血の昂ぶりをそのままぶつけるような、荒々しい接吻だった。

たくましいの腕の中で、ジゼルがもがく。暴れる。それでもセヴリアの体はびくともしない。狼になすがまま食いつかれるように奪われ続ける。

満足したのか、セヴリアがやっと体を離れた。薄ら笑いを浮かべるその顔を、ジゼルは火のつきそうな激しい表情で見上げた。

右手を振り上げて、ジゼルはセヴリアの頬を平手で音高く打った。女と侮ってか、セヴリアはよけることもしない。そのくせ髭面を痛そうにしかめてみせる。所作が芝居じみていて、いちいちジゼルの癢にさわった。

「驚いたね、女性への乱暴は騎士道にもとるんじゃないのか」
憎々しげにジゼルが吐き捨てる。

血に染まった長剣をぶら下げたまま、セヴリアはジゼルの悪態を平然と受け止めた。赤髭を生やした顔に酷薄な笑みが広がる。

「騎士が身を捧げるのは、貴婦人に対してだ」

ジゼルの頬が引きつった。炎の入れ墨が踊るように歪む。気色ばむジゼルを、セヴリアはむしろ楽しそうに眺めた。

「市井の金貸し風情には、相応しい接し方だろう？」

一瞬でジゼルの頭に血が上った。今度は拳を握りしめて右手を振る。だが顔に届く前に、あっけなく手首を掴まれた。

「勇ましいなあ、ジゼル。騎士に殴りかかる女商人なんて、聞いたことがないぜ」

「イヤ、離して……！」

桜色の唇から小さく悲鳴がこぼれる。強引に引き寄せられて、ま

たもセヴリアの腕の中に捕らえられた。

セヴリアが長剣を手放し、石畳にぶつかって寒々しい音を立てた。月は雲に隠れることなく、辱めを受けるジゼルを裁くように清らかな光を落とす。

セヴリアが力ずくで顔を寄せた。ジゼルの左頬、赤い入れ墨に舌を這わせる。

背筋に怖気が走り抜けた。込み上げる嫌悪感が吐き気となってジゼルを襲う。

なお執拗に、セヴリアは炎の形を真つ赤な舌でなぞった。悶えるジゼルの顔を間近で眺め、惨たらしく笑う。

ジゼルの悲鳴は言葉にならなかった。鹿が鳴くような声をあげて視線を宙にさまよわせる。そのうちに、地に倒れたままの乞食少年の姿が目映った。肩に受けた傷のせい、少年は気を失っている。もてあそばれながらも、ジゼルは安堵していた。純真そうな少年に、いまの姿を見せずにすんだことに。

セヴリアの舌が頬を撫でつけるたび、全身の肌が粟立つ。逃れようとしてジゼルは腕に力を込めるが、セヴリアの腕は鉄枷のようにびくともしない。

やがて飽きた玩具を放り出すように、セヴリアがジゼルの体を突き放した。よろめいて、ジゼルは地面にへたり込む。石の冷たさが尻に伝わると、急に涙が込み上げてきた。唾液で濡れた左頬を袖口で拭うふりをして、ジゼルは感情の高ぶりを必死で抑え込んだ。

セヴリアが石畳に転がる長剣を拾い上げる。その顔にはもはや何の表情も浮かんでいなかった。冷たく光るセヴリアの目を見るうちに、ジゼルの胸には怒りよりも恐れよりも、激しい虚脱感が込み上げてきた。

「セヴリア……、あの男に貸すために借りた金貨百枚のことだけど」
商人の骸にちらりと視線を走らせる。死んだ男から金を取り立てられない以上、借金はずいぶんかぶるしかない。それにしても商人の男を殺したのはセヴリアだ。多少、融通を効かせてくれてもいい

はず、ジゼルはそう思った。

「なんだ、そんなことか」

長剣を鞘に納めながらセヴリアが言う。

「別に回収不能になったからといって、今すぐ返せとは言わんさ。約束は秋だ。初秋の潮が上がってくるまでに金貨百枚を揃えてくれたらいい」

一切、容赦無し。ジゼルは小さくため息をついた。

「利子は金貨十枚だ。忘れるなよ」

そう、この男はこういう奴だった。欲深くて、狡猾で、酷薄で、金に汚く、女にも情けは無い。

ジゼルはもう一度左頬を袖で擦ってから、のろのろと立ち上がった。それから、倒れたままの少年に歩み寄る。

出血はしているものの、肩の傷自体はそれほど深くなさそうだった。ほっと息を吐いて、ジゼルは夜空を見上げた。

何事もなかったように、月が蒼い光を投げている。

近頃の若えのは働きやがらねえ話 その一

すかんびん
素寒貧。

いつそ気持ち良いぐらいに、貧相な部屋の中はがらんどうだった。打ち枯らした尾羽の欠片すら見あたらない。くたびれた板敷き床に、寝床らしい藁山があるばかり。長持ちの一つさえ転がっていないのだ。

ジゼルは怒りを通り越し、呆れることさえできず、虚しく笑いが込み上げてきた。なにせこの家には、借金のカタに持つて行けそんな物はなにもない。

戸口に立ち塞がるジゼルを、青年が見上げた。愛想うかがいのよな、しまりのない笑顔を作る。じろりと眼球だけを動かして、ジゼルが鋭く舌打ちした。

さきほどジゼルに突き飛ばされたこの青年は、立ち上がることを忘れたように床に腰をつけたままだ。ナメクジかてめえは、さっさと立ちやがれ。そう叫ぶ代わりに、ジゼルは左の拳を薄い土壁に荒く打ちつけた。貧家にふさわしい湿った音が響いて、ますますジゼルの頭をくらませる。

「で？」

こめかみのあたりを指で押さえつつ、ジゼルが口を開く。

「ダミアン、あんたに貸したのは銀貨二十枚。どうやって仕舞いをつけるつもり？」

青年がしばらく宙に視線を泳がせる。こいつにしか見えない蠅でも飛び回っているのかとジゼルが疑っていると、ダミアンと呼ばれた青年はやにわにジゼルと目を合わせた。それからにつこりと笑ってみせた。

鬼女でも籠絡しようかというほどに、極端に甘い顔だった。細い瞳はさらに細められて目尻が下がり、明るく輝く。癖のある栗色の髪もあいまって、愛嬌たっぷり。小汚い床にへたりこみながらも、

ダミアンの笑顔は日向で笑う猫のような風情があつて、貧乏臭さを誤魔化すのに十分だった。見た目に騙されないように、とジゼルの口元が自然と引き締まる。

「十日だけ待つてよ。旦那様をお願いして、給金の前借りをさせてもらうから」

「ふざけんなよ、ダミアン」

「へ？」

調子つ外れの声にさえも胡散臭さが漂っていた。

「あんたがメルヴィン商会をクビになつてるのは、とつくに知ってるんだ。十日の時間をくれてやつたつて、どっかに逃げ出すのが関の山だろうが」

「……」

ジゼルの目が剣先よりも鋭く尖る。にもかかわらず顔に笑みを貼り付けたままのダミアンは、いつそ見上げたものだ。

「そんな怖い顔しないでよお、ジゼルちゃん。美人が台無しじゃない？」

「てめえ、喧嘩売つてんのか」

赤い入れ墨の施されたジゼルの左頬が軽くひきつる。多分に脅しの混じった声を低く響かせると、ダミアンの笑顔が軽くこわばった。顔の美醜などとやりたいもないことを、しかも面と向かつて言い放つ輩に信用できる奴はいやしなない。ジゼルが眉をさらにつり上げる。半ば意図的に険のある表情を作り上げながら、ジゼルはふとセヴリアのことを思った。

野性味と狡猾さをそれぞれの手に握り締めて生きるようなあの男は、そういえば「美しい」などと賞賛めいたことを言つたためしがない。そのくせ荒々しく肩を抱き寄せて、求めるものはしっかりと求めてくる。いまや完全に床に座り込んだダミアンとは正反対の男だ。

（いや、そうじゃないな）

だらしなく笑うダミアンを見下ろしつつ、ジゼルは思い直す。セ

ヴリアもダミアンも、抜け目なく人を騙そうとする点においては同質な男たちだ。ただ、セヴリアが強い自分自身を偽装するのに対し、ダミアンは己を弱く見せようとする。したたかさという点では、もしかしたらダミアンの方が一枚上手かもしれない。貧弱そうな外見に惑わされると、一杯食わされそうだった。

「とにかく、さ。もう少し待ってよ、ジゼルちゃん。金はなんとか作るから。あ、そうだ。昔の仲間から、ちょっと美味しい話に誘われてるんだよね。それで一山当てたら、すぐに返すから」

ジゼルの神経を刺激しないように、最大限の配慮がされた優しい声色でダミアンが言う。言いつつようやく立ち上がり、のぞきこむようにしてジゼルの瞳を見つめた。もちろん、ごく自然な仕草でジゼルの両手を掌で柔らかく包み込むことも忘れていない。

すべてが酒場で働く小娘の目を眩ますようなやり口で、喋っていることもただの取り繕いだ。貧民街を這いずり回る金貸しを相手にするには、あまりにも安っぽい。ダミアンの甘い面の皮の下で、打算と自惚れが仲良く抱き合っているのが見えるようだった。ジゼルは真面目に話をするのが馬鹿馬鹿しくなって、頬を歪めて笑った。

ジゼルの頬が緩んだのを見て、ダミアンが意を得たりといったそう笑いかける。二人はしばし、にこやかに見つめ合った。修羅場の空気がにわかに緩み、雪解けの気配を見せる。

当然、極めて表面上のものでしかない。

感情の沸点を越えたジゼルが、ありつたけの忌々しさをかき集めてダミアンの向こう臍を蹴り上げた。「ぎえっ」と悲鳴も情けなく、ダミアンが再びうずくまる。

「あんだ、確か体だけは丈夫だったなあ？」

抗議の声すら上げさせず、ジゼルがダミアンの後ろ襟をつかみ取る。

「痛てて……、急に何するんだよ、ジゼルちゃん。そりゃ、昔から風邪一つひいたことないけどさ」

「結構」

言い捨てて、ジゼルは襟首を締め上げたままダミアンを戸口まで引つ張る。逆らおうにも喉元に上衣の襟が容赦なく食い込んで、ダミアンはなすがまま引きずられた。

ふと、ジゼルの目が木戸の内側に注がれて止まる。

そこには、野の花が輪に編まれて懸けられていた。麦粒ほどの小さな純白の花々が、騒動を見守るようにすきま風に揺れている。

貧乏つたらしい部屋に似つかわしくない清げな装飾に、ジゼルが目を細める。だが、それも一瞬だった。すぐに右腕に力を込め直した。

「ダミアン、あんた一月ほど荷揚げ所で暮らしな」

「え、何言ってるのさ、ジゼルちゃん。おれ、荷揚げ仕事なんてできないよ」

「やるんだよ。文無しが金を作ろうとしたら、力仕事しかないだろうが」

ジゼルが乱暴に扉を開く。薄い戸板の裏で花輪が不安げに揺れたが、ジゼルの目にはもう映らない。

「それからな、ダミアン。この際だから言っておくけど」

右手でダミアンを引っ張りながら、ジゼルが言った。

「そのふにやふにやした呼び方、金輪際やめろ。あたしはあんたより二つも年上だ」

日が暮れようとしていた。

赤味の強い光が街に降り注ぐ。網の目状に張り巡らされた運河の静水が夕日を照り返して、血脈のように鮮やかに浮き上がっていた。栈橋に繋がれた帆船は眠るように静かに夜を待ち、飛び交う海鳥が時折子守歌を聴かせる。運河を滑る小舟たちも、この日の最後の荷をいそいそと運んでいた。

王都、グルジュの一日が終わる。

牧羊の国から運ばれた羊毛、はるか東の国の魔女が棲む大樹の実から取れると伝えられる明礬、灼熱の国の魔術師たちが作り出したといわれる赤や藍の染料。波頭を越えて旅してきた大量の物品が波止場沿いの倉庫で眠っていた。明日になればそれらの商品は何百人もの職人の手に渡り、羅紗に加工されて再び海を渡るのだ。

こうしてグルジユの街は金貨を詰め込んだ木箱をまた一つ積み上げていく。貿易商の帆船が海を越えるたびに金貨何万枚、あるいは何十万枚が行き交った。

ダミアンが下男として雇われていたメルヴィン商会も、そんな貿易商の一つ。帆船を五隻も所有し、グルジユで大商人といえば、まずメルヴィン商会の総領ジョルジュ・メルヴィンの名が挙がるほどだ。ほかの財力ある貿易商がそうであるように、メルヴィン商会も伝統的な毛織物商の枠からはみ出して、市場と相場をにらみながらの投機的商業に重きを置くようになっていた。

なにしろつぎ込む金貨の重さが違う。桁外れの金で信じられないほどの商品を買集めて運び、噂を聞くだけで耳が腐りそうなほどの利益を上げるのだ。

港町グルジユの街路は、そんな怪物じみた商人たちが肩をそびやかして歩く世界だった。

だが、むろん街中すべからくというわけではない。

政庁舎前の広場から大街路を北に上り、鐘楼の角を西に折れて運河にかかる橋を四つほど渡ると、そこにはもはや金貨の光は届かない。朽ちかけた木造家屋が狭い路地に軒を連ねる貧民街区だ。

その日暮らしの日傭取り人夫、腕が悪くて客がつかない職人、金が無くて他の街区に割り込めない小売商、そういった人種が運河の澱みのように寄っている。

生き先の見えない者たちが一所に集まっているものだから、いさかい事は絶えない。騙す騙されるは当たり前、短剣や棍棒を振り回しての刃傷沙汰もざらにある。どつば、やつつけ、どんづまり。そうした言葉が形になり、犬の糞のようにそこら中に転がっていた。

落陽が赤く、光を失っていく。薄汚れた路地から闇が染み出してきて、街区も夜に飲まれようとしていた。

靴先に伝わった柔らかくて不快な感触に、ジゼルは思わず眉をひそめて立ち止まった。

「ああゝあ、踏んじやった……」

フードの奥に隠した顔を不景気にしおらせる。靴裏から漂ってくる異臭に、炎の入れ墨もへなへなと歪んでしまいそうだった。

気分はいくらか沈みがちだ。

長屋での押し問答の後、ジゼルは喚き回るダミアンを威しながら引きずって、口入れ屋に叩き込んだ。丸顔の店主が仲介した先は、宣言通り波止の荷揚げ場だ。春の潮が上がってくるこの時期、南海から大小様々な帆船がグルジュに押し寄せるから、波止場は大わらわだ。木箱に詰め込んだ薬種やら葡萄酒樽やらの荷揚げに羅紗の積み込みと、仕事は山のようにある。期間は一カ月。おそらくダミアンは、それこそ牛馬のごとくぶっ通しでこき使われるだろう。

貸し金取り立ての目処はどうにかついた。それでもジゼルの手元にはわずかな利子が残るだけだ。

セヴリアに返すべき金貨百枚。黄金の輝きではなく、無慈悲な重さだけがジゼルの肩にのしかかる。

街区の住人にしては珍しく、ジゼルの手には銭貨がふんだんにある。しかし、それもつまるところ金持ち商人や貴族から借りているに過ぎない。右から左へと忙しく銭を動かしても、ジゼルは金銀のわずかな欠片を得るばかりだ。

ともすれば丸くなりがちな背に力を入れて、ジゼルは歩いた。

向かう先は街区のほぼ真ん中にある居酒屋だ。外観は古びていて、柱はこころなし傾ぎ、板壁のところどころに隙間が見える。すり減った鋸銭びたせんを思わせる店構えだったが、たった一つ目を引く点があっ

た。

戸口の横に、騎士が馬上で使うような涙滴型の盾が掛けられているのだ。木製の模造品ではない。遠目にも鍛えられた鉄の鈍い輝きが見てとれる。しかも驚いたことに、表面にはに交叉する投げ槍の意匠が描かれている。王家の紋章だ。

店の看板代わりには、はったりが効いている。この店の五十がらみの主が王家に連なる騎士だ、などとはもちろん誰も思わない。おおかた合戦場にでもまぎれこんで、死んだ騎士からはぎ取ったのだろう。店に通う人々はそう思っている。

そんなわけで、この店は街区の人々から「盗人屋」とか「野盗の店」などと呼ばれていた。

これがグルジュの目抜き通りだったら大騒ぎだ。王家の紋章を店先に掲げて商売しようものなら、たちまち紋章官が手勢を引き連れてやってくる。また、「盗人屋」などという不穏当な店の名前が夜警隊の耳に入りでもしたら、あつというまに大勢の警吏が店を取り囲むだろう。

だが、官憲の手は貧民街区までは及ばない。街区の闇は濃く深く、雑多な人々の来歴も凶状も覆い隠してしまうのだった。

居丈高な騎士盾の横をかすめて、ジゼルは扉を開いた。

賑やかな話し声と酒の香が一緒くたになって鼻先にぶつかった。日暮れ間もないにもかかわらず、客入りは上々。仕事を早めに切り上げた職人や人夫たちが狭い店内を埋めていた。カウンターの向こう側では店主のガストンがにこりともせず料理ナイフを使っている。

この店は、いわばジゼルの「ねぐら」だ。二階の空き部屋を間借りして寝起きし、この店を拠点にして街区をうろつき回っている。ジゼルに金を借りたい客がこの盗人屋に知らせれば、一両日中には連絡がつくという寸法だ。

ジゼルは騒がしい店内を音もなく歩いた。奥の方に緑の布が掛けられたテーブルが一つ。ジゼルのいつもの席だ。

席に近づくと横から手が伸びて、自然な感じで椅子を軽く引いた。
「こんばんは、ジゼルさん。どうぞ」

涼やかな少年の声がジゼルの耳をくすぐる。幼さがいくぶん残る顔立ちに、新造の銀貨に似た青い瞳。あの乞食の少年だ。土埃にまみれていた顔は年相応の血色が戻り、地味だが清潔な服に身を包む頭に巻く給仕役然とした手巾から、金の髪がほんの少しこぼれていた。

あの夜、肩を刺されて気を失った少年を、ジゼルは背に担いだ。少年のおかげでジゼルは命を拾ったのであり、少年が受けた傷はいわば身代わりだ。路上に捨て置くなど、できるはずもない。思案の末に、ジゼルは二人分の体重がかかる足をこの盗人屋に向けた。セヴリアはそんなジゼルを興味なさげに冷たく眺めただけで、すぐに夜の中に姿を消した。

刺し傷はそれほど深いものではなかった。ほどなくして傷は癒えて、少年はごく当たり前のように居酒屋仕事を手伝い始めた。店主のガストンはとくに歓迎の意も示さなかったが拒絶もしない。感情に乏しい声で最低限の指示だけして、少年が立ち働くに任せていた。少年はリュカと名乗った。

「ありがとう」

ジゼルが赤く刻印された頬を緩める。リュカは最初こそ料理を運ぶ手つきも酔客の扱いもおぼつかなかったが、いまでは様になっている。狭い店内を懸命になって働き回るリュカを見ると、ジゼルはどうにも微笑ましいような気分になってくるのだ。

「今日の料理は野菜のニンニク煮込みとクロ麦のパンです。すぐに持ってきてみましょうか？」

「そうだね、まだ仕事が残ってるから皿に半分だけもらおうか。それと薄いエールも」

そう、日が暮れてもまだ仕事は続く。厨房へと去っていったリュカの後ろ姿を見送りつつ、ジゼルは気を締め直した。

そのうちにジゼルの元へぼつりぼつりと人が訪ねてきた。木工職

人風の男であつたり、菓子売り屋台の女主人であつたり、さまざまな者たちだ。ただ共通して、ジゼルの前にある緑布のテーブルの上にまとまった金を置いていく。

「ジゼルさん、今日の分だ。銀貨百枚と、それから……一枚の『贈り物』だ」

「毎度。今日の商売はうまくいった？」

「それなりだな。ここのところ商会の連中は景気が良いみたいで、手堅く注文が入ってくる」

「そりゃなにより」

人が入れ替わることに関心な会話が交わされて、そのたびに緑の布の上に銭貨が積み上がっていく。

金貸しにもいくらかの種類がある。その中でもジゼルの生業は俗に「日貸し屋」と呼ばれる。資金力の無い職人や屋台持ち、店舗商人に資金を日ごとに貸し出す商売だ。

朝一でジゼルから金を借りた店主たちは、それを元手に食材や原材料を買い込む。そして一日の終わりに元金と利子をジゼルに返しに来る、という仕組みだ。利子は日に五厘。長期的に見ればかなりの高利だが、一日で精算する上に元金自体がたいした金額ではないから、利子もたかが知れている。金の無い商人職人たちでもジゼルに金を借りれば、毎日そこそこの稼ぎを得られて、それなりに暮らしていた。

金貸しが利子を取ることに、教会はなにかとやかましく干渉してくる。同胞から利子を取ることは神が禁じている、金に金を生ませる利子の仕組みは悪魔の所業だ、と高価な紫の絹衣を着た司祭連中は声を荒げるのだ。だからジゼルは、利子の五厘を「贈り物」ないし「お礼」と呼ばせている。呼び名が違っただけの猿芝居ではあるが、案外こういった上っ面だけの取り繕いが世の中を作り上げるのかもしれない。小難しいことはさて置いて、とりあえずこうして店主たちとジゼルは日々の稼ぎを手にてきていた。

テーブルの上に銭貨がちよつとした城塞を築きつつある。ジゼル

は一枚ずつ貨幣を数えながら、しかし思考は別のところを漂ってた。ダミアンのことだ。荷揚げ所に叩き込んだから、取り立ての見当はついた。だが、例えばダミアンが荷揚げ所から逃げ出すこともありうるし、不幸にも荷揚げ仕事の最中に怪我をするかもしれない。そうなると話は少しだけややこしくなる。

そこまで考えて、ジゼルはダミアン宅の扉に掛けてあつた花飾りを思い出した。

洗いざらしたように何もない家の中で、ほのかな温もりを感じさせる装飾だった。その異質さが、ジゼルの頭に波紋を起こすのだ。

（女、か）

ジゼルの考えはそこに至る。錢貨を撫でる手は、頭の働きと関係なく正確に数を刻んでいた。

あの男に情婦がいるのなら、そつちからも取り立てることも考えた方がいい。その方がより安全に仕事を進められるというものだ。冷血な金貸しの知性が、ジゼルにそうささやかけた。

ジゼルの指が最後の銀貨を弾いた。貸出金と今日の利子、ぴったりに勘定通りだ。これで本日の仕事はお終い。

「リュカ、葡萄酒ちょうだい」

高らかに解放の声を響かせる。リュカがすぐに木のカップも持ってきて、深紫の酒を注いだ。

とりあえず、乾杯。難儀な事は明日考えればいいのだ。今日はもう、夜の帳が下りたのだから。

その二

男はジゼルの姿を認めるなり、椅子から跳ね起きた。

「こ、こりゃあ、ジゼルさん」

うろたえたように愛想笑いを浮かべる。この男、さきほどまでは椅子にふんぞり返り、顔に帽子を伏せて居眠りを決め込んでいた。それが、赤い入れ墨をこしらえたジゼルの顔を見るなり、ころりと態度を変えた。可愛らしいものだ、とジゼルは満足げに口元を歪める。

「サボってたわけじゃないですよ。ただ昼過ぎのこの時間は客足も絶えるもんで、少しばかり英気を養ってただけで」

男の前に山と積まれた干しアンズや干しイチジクなどの果物は、あまり売れた気配もない。ジゼルは笑いながらアンズを二つつまみ上げると、懷から小銀貨を取り出して男にくれてやった。

「別にあんたの働きぶりを見張りに来たわけじゃないよ。金貸しが客の周りをうろつくのは、習性みたいなものだ」

言いつつアンズにかじりつく。甘味を楽しむのは形だけ、ジゼルはすぐに脇へと目をやった。

路地の奥に、ダミアンが住む長屋の入り口が見える。監視の場所としては、この果物売りの屋台はうってつけだ。遠すぎず近すぎず、屋台の店主と話していれば怪しまれることもない。いざとなったら店主に金を握らせて見張りをさせてもいい。

羽毛のような日差しが、小さな通りの上にゆっくりと落ちてくる。路上にはかすかに暑気が立ち昇っていた。そろそろ服の内綿を抜いてもいいな、とジゼルはフードを深く被り直しながら思った。

「そっぴやあんた、ダミアンとは顔見知りだったっけ？」

「ダミアンって、その長屋の若僧ですか？ そりゃあこの場所で商売してますからちよくちよく顔は合わしますけど、顔見知りってほどじゃありませんよ。なんせ野郎はうちの屋台から一つだって

物を買ったことはないんだ」

三階建ての長屋はいたって静かだ。住人たちはそれぞれの食い扶持を求めて、出払っているらしい。

「それに何ですかね、あのダミアンとかいう奴は。ちょっと前までは大きな商家で小間使いをしていたみたいですが、どうも最近、暇を出されたみたいで。昼間っからぶらぶらしていますよ。いい若い者が情けない」

聞きながら、ジゼルは吹き出しそうになる。偉そうに説教を垂れるこの男も、ついさっきまで午後の日差しを張り出し布で避けながら高いびきをかいていたのだ。自らをあっさりと棚に上げるこの無責任さは、街区の気質と言っている。

「まったくね。メルヴィン商会に使われていたなら、それなりの暮らしはできていたはずだ。それをフイにしてしまうなんて。何があったんだろっかねえ」

「さあて、詳しくは知らないですけど、おおかたシヨボいヘマでもやらかしたんじゃないですか？」

ヘマねえ、とジゼルが言葉を口の中にこもらせる。ダミアンのあの締まりのない笑顔を思い浮かべると、当たらずとも遠からず、という気がした。例えば、旦那様のお氣に入りの女中に手を出した、とか。なにせ、借金の取り立てに現れたジゼルの手でさえも、とりあえず握ろうとするほどの女ったらした。

情婦も一人とは限らないな、そう思いながらジゼルはアンズをもう一口かじる。

小さな通りに、ぼつりぼつりと人が歩いていく。脇に持った籠に春の野菜をつめこんだ人が目立つのは、通りの先の青物市場から人が流れてくるからだろうか。

と、乾いた道の上を頼りない足取りで歩く姿が目に入った。タマネギやらソラ豆やら、抱え込んだ大量の野菜の重みに苦労しながら歩いてくる。

(……リユカ)

見慣れた金の髪が柔らかく風に揺らされた。盗人屋の店主に頼まれて、青物市場で食材を買い付けた帰りなのだろう。

ジゼルが胸のあたりで小さく手を振る。リュカはすぐに気づいて、はにかむように笑って歩み寄ってきた。

「精が出るね。今日も美味しい食事でありつけそうだ」

「今晚は野菜と羊肉の炒め物だそうですよ。ジゼルさんはお仕事ですか？」

「なに、仕事ってほどじゃないよ。転ばぬ先のなんとやら、さ」

言いながらジゼルは懷を探る。財布から小銭を取り出して店主に渡し、干しアنزの山から一つを指でつまみ上げた。

「食べる？」

「あ、はい。あの……ええと」

嬉しそうに顔を輝かせたり、ちよつと困ったみたいに眉を寄せてみたり、リュカの表情が忙しく移ろう。両手を野菜にふさがれてアنزを受け取ることもできず、かといって食材を地面に置くこともためらったらしい。

目を細めてジゼルが笑う。炎の入れ墨も丸く緩んでしまいそうだった。

指でつまんだアنزを、そのまま困り顔したリュカの口元に近づける。リュカのまどかな頬に、さつと朱が走った。だが、それも束の間。観念したようにリュカがおずおずと口を開く。アنزの花びらみたいな色をした舌がわずかにのぞく口へ、ジゼルは薄黄色の実を滑り込ませてやった。

雖に餌をやる親鳥に近い心境だったかもしれない。なんとなく温かいような心持ちを胸の奥の方を感じる。感じるが、だからといってどうと言う程のものでもない。ジゼルは半ば無意識的に感情の波を押し潰した。

代わりに頭の中で別のことがよぎった。この少年はどこか埃臭さを感じさせないところがある。そんなふうに思うのだ。

街区育ちの空きっ腹を抱えたガキなら、水菓子一つだって貰える

となれば飛びつきそうなものだ。それこそ両手の荷物なんか放り出して。

あるいはこの少年は、グルジュを囲む城壁の外からやって来たのかもしれない。同じように寒村から街へと入ったジゼルはそう思う。逃亡民でも城壁の中で一年を過ごせば、晴れて自由民の身分を得ることが出来る。そんな掟に一縷の望みを託して、困窮の暮らしから都市へ逃げ込む者は多いのだ。もっとも、自由民となって城壁の中で幸せな暮らしができるかというと、そうでもない。農村では領主の納税官に追われ、街に逃げてからは銭貨に追われる。そういった男たちをジゼルは何人も見てきた。

都市の水を飲んだからといって、まともな働き口がすぐに見つかるものでもない。日傭取りで糊口をしのぎきれなくなると、力の弱い者は乞食に身をやつし、屈強な男どもは盗みやゆすりを働く無頼に成り果てるのだ。

改めてリユカを見つめる。アンズを美味しそうに飲み下し終えて、「ありがとうございます」と丁寧にお礼まで述べるあたり、穏やかな土地でまっすぐに育ったのだろう。その純朴さが、ジセルに太陽と緑の匂いを思い起こさせる。

「その子、ジゼルさんの息子ですか？」

強面の入れ墨顔が緩んだのを見て、店主が物珍しげに言った。

「馬鹿野郎、盗人屋に新しく入った給仕役だ。くだらないこと言っていないで、貸し金の『お礼』を稼げ」

ジセルが冷たく言い放つと、店主は首をすくめて黙り込んだ。

確かに息子に見えないくもない。ジゼルは今年、二十五になる。街の娘たちは概して結婚が早いから、ジセルの年齢になるとリユカぐらいの息子がいたとしてもうなずける。

だが現実にはジセルには子どももないし、伴侶となる男もない。街区で逃亡民の女一人が生きていくのは、やはり並大抵ではなかった。心を固い殻で鎧い、いかめしい鉄面皮を作り上げ、返済を渋る客の尻を蹴り飛ばす。そうやって日々の糧を稼ぐのが精一杯。

甘い慕情を男どもに寄せたところで懐の金を巻き上げられるのがオチだったし、そんな生活を寂しいと思う心すらどこかに置いてきてしまった。

宙をさまよったジゼルの視線が、ふと止まった。通りの向こう側、二人連れが歩いて来る。

異様な男たちだった。二人とも昼日中に似合わないどす黒い雰囲気を出しながら、眼だけが鋭く光る。まくり上げた袖からは岩を荒削りしたような上腕が飛び出していたし、腰帯にぶち込んだ短剣も見る者を威圧する。街区に巣食う悪党ども、ジゼルはひと目見てその見当をつけた。

三人連れは通りをまっすぐに、ダミアンの長屋に向かって歩いて行く。

（あの女つたらし、こんな悪党どもとつるんでやがったのか）

フードで顔を押しさえながら、ジゼルが小さく舌打ちを飛ばした。ほどけていた神経が一気に張り詰めて、ロープの下の子が栗立つ。

男どもの足取りには顔なじみを訪ねるような気軽さはなく、ある種の剣呑さすら漂ってくる。

リュカが不安げに顔を曇らせた。ささくれ立つようなジゼルの雰囲気を感じ取ったのだ。ジゼルの視線を追って、通りの向こうへとリュカが首を回す。

「顔を向けるな」

表情を少しも動かすことなくジゼルが言う。押し殺した声に、リュカはあわてて顔をそむけ、野菜を抱え直した。

男どもは何事かをぼそぼそと話しながら、長屋の共用廊下に入っていた。

「ジゼルさん、あの人たちは……？」

「さあてね。あたしの客の血を吸う羽虫か。それとも、もつとはつきりした敵、か」

建物の中からダミアンの名を叫ぶ声が聞こえてくる。それに、木戸を荒々しく殴る音も。

今頃ダミアンは荷揚げ所で骨もすり切れるほど働かされているはずだ。当然、ダミアンの家からは何の音も返ってこない。苛立った男どもが悪態混じりに声を張り上げる。木戸を蹴りつけるような音も響いてきた。

ひとしきり騒いでから、男どもはようやく長屋の門から姿を現わす。垢じみて黒い顔に血をのぼらせて喚くさまは、飢えた野良犬そのものだ。

「あんまり近づきたくない人種だねえ」

言いながらジゼルがため息をこぼすと、リュカは抱えた野菜の向こうから心配そうな顔をのぞかせた。

木戸の内側には花飾りが掛けてあるはずだった。麦粒ほどの小さくて可憐な花を編んで作った、華美とはほど遠い飾り。ひそやかに部屋を彩る花飾りに、ジゼルは作り手の女の真情が見える気がした。控え目でけつして人に先んじることはないが、それだけに思っ気持ちは強い。そんな素朴な町娘の姿が、白い花を通して見えるようだった。

だが、悪党どもは木戸をあんなにも強く蹴りつけた。戸の内側に掛けられていた花飾りは落ちてしまっただろう。もしかしたら編み込まれた白い花も解けて、ばらばらに崩れて床に転がっているかもしれない。

ジゼルは自分でも気づかないほど、小さく眉をしかめた。

男どもは短剣の柄のあたりを手でいじくりながら、門の前で話し込んでいる。どうやらダミアンが帰ってくるのを待つつもりらしい。「近頃、ああいう手合いが増えましてね」

干しアンスの山へと目をそらしたまま、店主が口を開いた。関わり合いになりたくない、という気分が口調の端々から漂っている。

「去年、南部はひどい凶作だったでしょ。飲まず食わずで城壁の中へと逃げてきた奴は大勢いますよ。たいがいの奴らは賃仕事にありついたりして上手くやっているんですが……。人が増えると、どうしてもはみ出す奴も多くなっちゃう。ああいった奴らの押し買いや

ら狼藉やらで、屋台を潰された仲間も同業組合ギルドの中にいます」

忌々しく吐き捨てる。もちろん、男どもには聞こえないような小さな声で。

ジゼルが何かしら労りの言葉を口にしかけた、その時だった。

青物市場の方から女が一人、歩いてくる。

十五、六歳か。まだ若い町娘だ。草染めの質素な上衣を着て、栗色の髪を働きやすいように肩のあたりで一まとめにしてある。ゆで卵を思わせる白い顔はどことなく優しげだ。左手に提げた布袋の中では、名も知らない白い花が束になっていた。

（あの娘だ）

目にした瞬間に、ジゼルの直感が働きかけた。ダミアンの部屋の白い花飾りと、町娘の立ち姿がぴたりと重なるのだ。

娘はやはりダミアンの長屋へ向かって歩いている。静々と足を動かすたびに、小さな白い花が揺れた。

ぞくり、とジゼルの背筋がそそけ立つ。

長屋の前では二人組の悪党がダミアンを待ち伏せしている。男どもとダミアンの関係は知れないが、それほど友好的なものとも思えない。おそらく金銭絡み。何かのネタでダミアンをゆすりに来たとか、そんなところだろう。

そこへあの娘がはち合わせたらどうなるか。ダミアンの貸し金事情婦からも取り立てる、なんてことはジゼルでも思いついたくらいだ。男どもだって同じこと。目の前に居合わせたダミアンの縁者にケツを持たせようとするだろう。少しぐらい荒っぽい手段を使っても。

唇を噛みしめる間にも、娘はどんどん近づいてくる。長屋と娘の間はおよそ五十歩ほど。ちょうどその中間にジゼルたちが立っている。ジゼルが無言で見つめる娘の姿を、リユカも体を捻って眺めた。

男どもも長屋に向かって歩く娘の姿を認めたようだ。ささやき合いながら、顎で娘の方を示した。

ジゼルの顔にあせりが浮かぶ。リュカはジゼルを見上げて、思案げに眉をしかめた。

このまま歩いていけば、純朴そうな娘が不幸な目にあうだろう事は予想がつく。かといって、どうやって娘に危機を伝えるか。下手のことをすれば、ジゼルも男どもに目をつけられてしまう。

意外にも、真っ先に動いたのはリュカだった。

「リュシエンヌさん！」

聞いたこともない名を大きな声で呼んだ。呼び止められた形の娘も「リュシエンヌ」が誰のことか分からず、戸惑ったように目を見開いた。

ジゼルは一瞬でリュカの意図を悟った。見上げてきたリュカの瞳を見て小さくうなずくと、ジゼルは野菜を詰め込んだ籠を受け取る。リュカはすぐに娘に向かって駆け出した。

聡い子だ、と内心で舌を巻いた。ジゼルの雰囲気、それに悪党どもの様子だけでおおかたの事情を察したらしい。待ち合わせをした知人のふりをして、男どもの目をくらませようという寸法だ。

「見てください、今日は市場で良い野菜がたくさん手に入っただですよ」

「あの……、ちょっと」

立ち止まっていた娘は、リュカに手を引つ張られて困ったように歩き出す。笑いかけるリュカの顔は、当然半分以上演技だろうが無邪気そのもので、「あなた、誰？」などと無残なことは言い出せない雰囲気を作っていた。なかなかの役者ぶりに、ジゼルもフードの中で苦笑いだ。

良い働きを見せたリュカを応援するように、ジゼルも娘に向かつてまるで古くからの友人であるかのように大きく手を振る。訳が分からなくてますます眉をしかめる娘の顔は、ちよつとした見物だ。みものジゼルが横目を走らせる。長屋の前の男どもは、興味を失ったように仲間内でぼそぼそと話していた。

ほっと息を吐き出して、リュカに引つ張られてきた娘に野菜籠を

差し出した。

「見なよ、リュシエンヌ！ 丸々とよく育ったタマネギだろう、それにソラ豆も安かったんだ。店主が今晚は羊肉と春野菜の炒め物を作るって言ってたよ」

「ええと、誰かと間違えてるんじゃない——」

口ごもる娘に顔を近づけて、小さくささやいた。

「あたしの背中越し、ガラの悪い男二人組が長屋前にいる。見えるか？」

ジゼルの向こうへ目をやって、娘はみるみるうちに顔を曇らせた。手に提げていた布袋も身を守るようにして胸に抱え込む。不安げに揺れる娘の心が、ジゼルには掌でなぞるかのように分かった。

とはいえ、善人ぶったジゼルにしても、フードをめくれば男どもにも劣らない悪相が現れる。その矛盾がまた、ジゼルの軽く笑わせた。

「あいつらはダミアンを狙ってる」

フードの奥から低い声を響かせると、娘は小さく身を震わせた。怯えてこわばった顔でさえも、可憐さを感じさせる。名も無い野の花みたいな娘だ、とジゼルはフードの中で思う。

「あんた、ダミアンの女なんだろ」

何気なく言ったつもりだった。ジゼルにしてみれば軽い確認以上の意味はない。

しかし、娘の反応はジゼルの予想を超えていた。

青くなりかけていたはずの顔に、瞬く間に赤味が差していく。薄く開かれた唇は何も喋ることなく、ほんの少し震える。それから娘は、栗色の髪の毛の生え際まで赤くしてうつむいてしまった。布袋をいっそう力を込めて抱き締めながら。

（花も盛り、かよ）

見ていたジゼルの方が面映いような気持ちだった。フードがなければ、少しだけ熱く感じる頬の色をリュカに見られてしまったらう。

自分にもこんな時があっただろうか。振り返ろうとしてジゼルは軽く首を振った。

二人組の男どもをやり過ごし、ジゼルは娘と連れだって青物市場へと足を向けた。

午後にさしかかり、青物市場の通りに客の姿は絶えていた。そのかわりに、商人たちは夕方の書き入れ時に備えて商品を揃えるのに忙しい。細い運河に小舟がせわしなく行き交って、大量の野菜を市場に運び込んでいる。

ジゼルは娘と二人、青物市場の通りをゆっくりと北に上った。荷車を引く商人とすれ違うたび、柔らかな春野菜の香りが鼻をくすぐる。

どうも妙な気分だった。

本当ならジゼルは、この娘とのんきに肩を並べて歩いているはずではなかった。逃げられないように細い路地かなんかに連れ込んで押しのきいた声とフードの奥からちらつかせる入れ墨とで脅し上げて、ダミアンの貸し金を娘にかぶせるつもりだったのだ。必要とあらば、胸ぐらを締め上げてでも。

狐が狩りの最中に何かのはずみで野兎を助けてしまったら、おそらくこんな心境になっただろう。いまさら態度を豹変させて牙をむくこともできず、空しく鼻を鳴らすしかないのだ。

リュカには一応、礼を述べるべきだろうか。野菜籠を抱えて盗人屋へと急ぎ足で歩いていった後ろ姿を思い出し、ジゼルはそんなことを考える。

娘は、ノエミと名乗った。

「あの二人組の男ども、ダミアンの仲間？」

「よくは知りません……。でもあの人の周りに雰囲気の良い男の人が近づいていたのは感じてました」

うつむきがちにノエミが答える。

「最近、様子がおかしかったんです、あの人。夜に出かけてたことも多かったみたいです、なんだか落ち着きが無くて。そのうちに仕事を貰ってた商会もクビになっちゃって。わたし、不安で……」

ノエミの頬のあたりに栗色の髪が落ちかかり、力無く風に揺れた。ジゼルの頭の中に、ダミアンの気の抜けた笑顔が浮かんた。確かにだらしなさそうな奴だ。特に女に關しては。

「でもあいつ、悪事に手を出すような奴には見えないね」

何気なく漏らしたジゼルの言葉に、左を歩いていたノエミの足が止まった。ゆつくりと首を回して、戸惑いながらもフードの奥へと目を向けてくる。拳一つ分背の低いノエミに、ジゼルは自然と見上げられる形になった。

「あの、ジゼルさんは」

ジゼルも立ち止まり、ノエミを見つめた。清らかな野の花のようだった顔には、いつのまにか園芸花のように鮮やかで歪な色が浮かんでいた。

「あの人とは、ダミアンとはどういう関係なんですか」

細い眉のよじれたあたりに、隠しようもない心のざわつきが見えた。そのあまりの美しさに、ジゼルはほっと息を吐く。

往來のど真ん中で立ち尽くす二人を、荷車を引いた商人が迷惑そうに舌打ちして避けていった。ジゼルはすれ違ふ商人に一瞥さえくれてやることなく、ノエミの顔を見た。

睨みつける、というには多少荒々しさが足りない表情だった。ブラウンの瞳は刺すような光を放っているものの、ジゼルがあらぬことを口走ればすぐに涙をこぼしていいそうなほどに脆く見えた。固く引き結ばれたはずの口元もかすかに震えている。かえってジゼルの方が毒気を抜かれたような気がして、ローブの中で軽く肩をすくめた。

それからジゼルはフードの裾に手を伸ばして、迷うことなく取り払った。

ノエミの顔色が一気に変わる。

薄紅色の唇から悲鳴に似た吐息が漏れだした。小さな憎しみを含んでいた目は大きく見開かれ、ジゼルは左頬に吸い寄せられる。居心地悪そうに、ジゼルは無表情を決め込んだままだ。

「ダミアンとはちょっとした顔馴染みさ。あんたが勘繰るような仲間じゃない」

炎の入れ墨は左半面を焙るようにぴたりと張り付いていた。感情を消し去った目の周りを、炎のしっばが悪趣味に飾り立てる。

呆然としていたノエミが、正気を戻したように目を逸らした。

「ごめん……なさい」

ジゼルはまた、ローブの中で小さく肩をすくめる。

そんなに簡単に負けてちゃ、たちまち人に喰われちまうだろうが。罵りに近い言葉を、ジゼルは喉元で押しとどめる。太陽の光しか知らなさそうな小娘には、少し酷な気がしたのだ。

「行こう。道の真ん中をいつまでも占領してたら迷惑だ」

言い捨てて踵を返す。

悪相の顔をフードの中にしまい込もうとした、その時だった。

「子どもが生まれるんです」

心臓の裏側のあたりをノエミの声が叩いた。思わず振り返るジゼル。

「いつ？」

「冬に。雪がちらつく頃には、って母さんが」

不覚にもジゼルは、ノエミの下腹のあたりに目を奪われた。ゆつたりとした草色のローブに包まれた体には、まだ命の丸みはない。

この小娘、もし詐話師だとしたら一流だ。一瞬、心を捕えられたことをって、ジゼルは眉根を寄せる。

だが、どう考えてもノエミからは、街の底を這いずる者に独特なしわがれた臭いはしない。日の光を欲するように想い人の心を求める、儚げな女の姿があるだけだった。

（あの色男、何をやってるんだか）

呆れ返ったように、ジゼルは炎の筋が絡みつく左目を閉じてみせた。

細い運河のほとりに小舟が停まる。すぐに人夫たちが青物を満載した籠荷を降ろしにかかった。額に汗を浮かべて働く男たちにダミアンの姿を重ね合わせ、ジゼルは黙り込んでしまった。

その三

夕刻。

鷗の鳴き声が落陽にさみしく響き出すと、荷揚げの仕事も一段落だ。時刻を見計らって、ジゼルは港の荷揚げ所へと足を向けた。手には安物のエールを詰めた瓶を持っている。

波止場の頭領に話を通すと、すぐにダミアンが呼び出されてきた。荷揚げの力仕事がよくこたえているらしく、足取りがふらふらとおぼつかない。疲れの浮き出た顔でジゼルを見て、それでもなんとか笑いを形作った。

「だいぶ苦勞してるみたいだね」

「体がばらばらになりそうだ。酒樽がこんなに恐ろしく見えるなんて、思いもしなかったよ」

ダミアンは棧橋に繋がれた船を忌々しそうに見やった。

港内は潮が引いて、広大な干潟が現れていた。帆を畳んだ大小の船がむき出しになった海底に船体を傾かせながら立っている。柔らかい泥の地面を寢床にして、波頭をかき分けた疲れを癒しているようだ。並び立つ船の間へと二羽の海鳥が仲良く降りたち、干潟の泥をかき回して夕飯を探していた。

「ノエミに会ったよ」

ダミアンの顔に緊張が走った。いくらかこわばった顔つきでジセルを見つめてくる。刺すような視線だったが、ジセルの入れ墨は平然と受け流した。

「可愛い娘じゃない。こまごまと働きそうだし、嫁にするには申し分ない。子どもも生まれるんだろ？」

金貸しの底意地の悪さをわざと臭わせるように、ジゼルは言う。

ダミアンの顔がさらに険しさを増した。

「……あいつに手を出そうってんなら、いくらジゼルちゃんでも許さねえ」

いつものすつとぼけた雰囲気はどこへやら、淒味のある声だった。飄々とした笑いの表情も消えて、白かった顔が赤黒く歪んでいる。

とはいえ、こんな時でも変わらず「ジゼルちゃん」と呼ぶあたり、荒事に不慣れなダミアンの性格がにじみ出ている。悪党どもの群れに加わって悪事に手を染めるような性根は、やっぱりこの男には備わっていないらしい。ジゼルの瞳に笑いをこらえるような光がちらついていた。

「手なんか出すかよ、馬鹿野郎が」

ジゼルが手に持った酒瓶を、軽くダミアンの肩に打ちつけた。よほど疲れが体に染みついているらしい。たったそれだけのことでダミアンは軽くよろめいた。

「でも、その怒った顔は悪くないな。いつものふにやふにや顔よりも、ずつとまともだ。ほらよ、これは差し入れ。みんなで飲むといい」

肩にぶつけた酒瓶を、そのままダミアンにくれてやる。やや戸惑ったように、ダミアンは瓶を受け取ったまま立ち尽くしていた。

「ただな、二人組の男どもがあんたの住まいを嗅ぎ回ってる。あいつらなら、小娘を手にかけるのもいとわないだろうな」

「嘘だろ！ あいつらなんでおれの家を知って……」

慌てたダミアンが酒瓶を取り落としそうになる。

「あいつらは何なんだ、ダミアン。あんた、何をしでかした？」

ジゼルが腕を組んで、冷たく目を光らせた。さっきまで血が上っていたダミアンの顔は、いまや夕日を浴びてもなお青ざめている。

鷗が悲しげに二つ三つと鳴いた。干潟から吹き寄せる風が、ジゼルの髪と頬を撫でる。かすかに冷たい、夜の湿り気が混じり始めていた。

「……金が、どうしても必要だったんだ」

うつむいたまま、ダミアンが声を絞り出す。

中心街の尖塔から日暮れを知らせる鐘の音が聞こえてきた。この鐘を合図に、職人たちは一日の仕事を終える。堅気の者たちは明日

に備えて眠る準備を始め、そうでないものは闇に紛れて蠢きだす。聖と邪の境が音となって街を覆った。

「おれは字も読めない、手に職もない能無しだからさ、できる仕事といえば小間使いぐらいのもんさ。おれはそれでいい。街区の土に埋もれるような生活してたって、おれ一人だけなら何の不満もないんだよ。でも」

ジゼルから受け取った酒瓶を、ダミアンは手が白くなるほどに握り締めている。

「子どもが、生まれてくる。ノエミとおれの子だ。子どもにはさ、おれみたいな暮らしをしてほしくなかったんだ。腕の良い職人のところに徒弟として入れてもらって、立派に生きていける技能を身につけてほしい、そんなふうに考えてた。男の子なら鍛冶職人、女の子なら仕立て職人、なんてね。でも、弟子入りするにも金が必要。評判の良い店ならなおさらだ」

ダミアンの顔が苦しそうに歪んだ。

「そんな時だ、あの二人組がおれに近づいてきたんだ。メルヴィン商会の金蔵から金貨を盗みだそう、って」

聞いたジゼルが目を尖らせた。

「この馬鹿が！ あんた、そんな話を受けたのか？」

「……言つたろう、金が必要だったんだ。メルヴィン商会の蔵には確かに、この街区じゃお目にかかれない金貨が山と積まれている。けどね、あいつらは押し込み強盗をやるつもりだった。おれが宿直してる日に内側から商館の門を開けさせて、斬り込む算段だったんだよ。笑っちゃう話だけど、おれ、急に怖くなってさ」

大きく、ジゼルが息を吐き出す。

「正解だ。もしあんたが門を開いたら、間違いなく強盗どもは用済みになったあんたを殺してたはずだ」

「そっかあ、やっぱおれ、馬鹿だったんだなあ」

放心したようにダミアンがつぶやいた。顔はジゼルに向けられているものの、ダミアンは何も見てはいない。あの毒気の足りない小

娘と、まだ見ぬ我が子のことと頭がいっぱいなのだろう。ジゼルはかすかに目を細める。馬鹿になりつつも幸せを追う顔が、ほんの少しだけ眩しかった。

「結局押し込みの話は流れたんだろう。なんであなたは商会をクビになっただんだ？」

「それがさ、いったん『盗んで金を手に入れる』って考えが出来上がっちゃうと、不思議なものでその甘い考えが頭から離れなくなっちゃうんだ。それである日、旦那様の部屋に呼ばれた時に、つい机の上の手文庫に目がいつて……」

「隙を見てくすねた？」

「ダミアンが力なくうなずく。」

「現場を見られたわけじゃないけど、それ以来なんとなく疑いの目を向けられるようになって。ほどなくしてお払い箱になっちゃったんだ。手文庫の中に入ってた銀貨わずか三十枚ぼっちの代償に、仕事がなくなっちゃったんだ」

「それなら、何であの二人組はいまだにあんたにつきまとってるんだ？ あんたが商会をクビになったなら、用が無いはずだろ？」

「あいつらはおれが商会で盗みをやったことを嗅ぎつけてきたんだ。それで、おれがもっと大金を手に入れたと思い込んでる」

「分け前を寄越せ、さもなければ盗み働きを夜警隊に刺すぞ、ってとこか」

「答える代わりに、ダミアンは目を伏せた。」

「はるか遠くに見える海岸線が、太陽の最後の赤光を照り返した。」

林立する帆柱が波止場に長く影を伸ばしている。鴉の声は、いつの間にか聞こえなくなっていた。

「手文庫の中には金以外は無かった？ 例えば証書とか手形とか」

「分からない。手紙みたいなのはあったけど、おれ、字が読めないからさ。ああ、そうだ」

「言いつつ、ダミアンが懐を探った。」

「ジゼルちゃんは字が読めるよね。だったら、おれの代わりに手文

庫の中の書類が何なのか、確かめてくれない？」

懐から取り出したのは小さな鍵だ。ダミアンの部屋の錠だろう。「いいけど、もしその書類が大枚の価値があるものだったら、あたしが持ち逃げするとは思わないのか？」

ダミアンは首を傾げて、かすかに笑ったようだった。

「メルヴィン商会が大騒ぎになっていないみたいだから、たぶんそんなに価値のあるものじゃないよ。ジゼルちゃんがこの街で築いてる、貴族や商会との付き合いや貸し客との関係に比べたら、ね。大事な人間関係をフィにしてまで、ジゼルちゃんは持ち逃げしないだろ」

いっぱしの口をきいたダミアンを、ジゼルは鼻で笑い飛ばした。

そういう賢さは、いまさらになって発揮するもんじゃない。

子どもが生まれるとなると、誰しも平静を失うものなのだろうか。自分自身に置き換えようとしても、ジゼルにはいまひとつ実感がわかなかった。

普通、鍵は一家の妻が持つべきものだ。

女たちは鍵を手にかの諸事を取り仕切り、金の出し入れを管理する。家の鍵を手渡すことで、求愛の手段としている地方もあるほどだ。

もちろん、ダミアンから鍵を預かったのはどこまでも即物的な理由からであって、そんな艶っぽさは無縁だ。懐から取り出した小さな鍵は灰色にくすんでいて、どんなに見ても粗末な金属製の一塊でしかない。

やはりノエミこそがこの鍵を持つのにふさわしいだろう。ダミアンの鍵は小さな金属片のくせに手の中で妙に冷たく、ジゼルはやや持て余していた。

長屋の廊下は昨日と同じように人気無く静かだった。窓もなく埃

つばい通路を大股で歩く。快適さに欠ける造りながら部屋に鍵までついているところを見ると、もしかしたら倉庫を改築した長屋なのかもしれない。

ダミアンの部屋の前まで来ると、ジゼルは掌の鍵を錠前に差し込んだ。ごく軽い音がして、錠があっけなく外れる。

そつと扉を押し開いて、ジゼルは部屋の中に体を滑り込ませた。体が変に緊張感していた。

浮気相手の家に忍び込んだとしたら、もしかしたら似たような心境になるのかもしれない。主のいない部屋はがらんと置いて生気がなく、なんとなくジゼルを気後れさせる。これは仕事だと、ジゼルはなぜだか自分に言い聞かせた。だが、そんなことを考えるほどに、ジゼルの頭の中にノエミの毒気の足りないにらみ顔がよぎる。

仮にこの瞬間、ノエミが部屋を訪ねてきたら、どういった言い訳をすればいいのだろう。真実をありのままに話したとしても、ダミアンとノエミの関係にいらぬ波風が立ちそうだった。

さつさと事を済ませたほうがよさそうだ。ジゼルは頬をひと撫でして、部屋の隅にある藁の寝床に近づいた。

屈み込むと、ダミアンに教えられた通りに床板に不自然な隙間があった。

（この前来た時には気づかなかったな）

ジゼルが苦笑う。先日は部屋をひと目見て、金目の物は無いと決めたのだ。目付けが甘い、と言われてもしかるべきだろう。

あらかじめ用意していた鉄挺かなてこを隙間に押し込む。ぐいと力を込めると、さして抵抗もなく床板が浮き上がった。

（これか……）

赤茶色に塗られた木製の小箱が、床板の下に収められていた。

手に取ってみると、やけに軽い。中に入っていたらしい銀貨の方はすでに使い切ったようだ。

蓋を開くと、確かに書類らしき紙が畳まれていた。羊皮紙ではあるものの、質は低そうだ。手触りもざらりと悪く、ジゼルの胸の中

にあつたいくぶんかの期待はみるみるしぼんでいく。

三つ折になつた紙を、ジゼルの指が無造作に開いた。

金貨一万枚。中ほどに書かれたその文字がまず、ジゼルの目に飛び込んできた。

一度だけジゼルの心臓が大きく鳴る。

金額はただの数字の羅列だとはいえ、紙の粗悪さに似合わない莫大なものだ。あるいはメルヴィン家ほどの商会になると、一万枚の金貨のなど日々の食事のようにさしたる感動もなく流れてしまうものなのだろうか。

乾きかけた唇を舌で湿し、ジゼルは書類の頭から目を通した。

「我がメルヴィン商会は貴殿の用意した品物を慎重に審査した。数は多く揃っているものの下等な品が多く、というものの中には驚くほど上等なものもある。査定は難航を極めたが、貴殿と翌年以降も良好な関係を築きたい思いも込めて、金貨一万枚を対価として支払うことを決定した」

どうやら買い取り通知の類らしい。ごく簡素な文が走り書きされていてから、正式なものではなく単なるメモ書きだと分かる。だいたい宛名が頭に書かれていないのも、本来の書式から外れている。宛名は文章の末尾に、付け足されたようにひっそりと書かれていた。

その名前を見て、ジゼルは一瞬、我が目を疑った。

「……セヴリア・デュ・クラルテ……殿」

ジゼルの胸のあたりが不気味な予感に粟立つ。予感の正体は、自身でも判然としない。ただ銭貨を追いますジゼルの直感が、この書類から闇夜に動く黒雲のような奇怪な気配を感じ取った。

冷静に考えると、この書類からはセヴリアとメルヴィン商会とが金貨一万枚相当の取引をした、ただそれだけの事実が見えるだけだ。セヴリアは王家に列する中流貴族だから、大商家のメルヴィン家と取引があっても何も不自然ではない。

そこまで考えて、ジゼルの心がまたざわりと鳴った。

本当にそうか？ この文面ではセヴリアがメルヴィン商会に物を売ったことになっている。金貨一万枚相当ということは、領地から上がった農作物だろう。だが、在地の商人を通さずにいきなり王都の商家に売り払ったりするだろうか。不可能な話ではない。だがどこか無理矢理に組み上げたような歪さが、この書類から臭ってくるのだった。

ジゼルは頭の中でさまざまな憶測が駆け巡る。しかし何一つ明確な形を成すことなく、鍛鉄の火花のように消え去った。

突然、廊下の方から物音が聞こえた。床板を踏み鳴らす足音。思考の海に沈んでいたジゼルは、一瞬にして現実に引き戻された。

誰かがこの部屋に近づいてくる。

ジゼルは大急ぎで書類を手文庫にしまい込み、元通り床板の下に敷き直す。下ろしていたフードも被り直した。

歩いてくるのはノエミではない。足音は乱暴で重々しいものだったし、おまけに二人分聞こえてくるのだ。戦慄が百足の形をして、皮膚の上を這い回るようだった。

「おい！ ダミアン、いるのか？」

野太い声が響く。すぐに扉が開け放たれた。

部屋に入った男たちはジゼルを見るなり、それぞれにいぶかしげな表情を作った。屋内にもかかわらずフードを被ったままのジゼルを見て、陰気な女だ、とでも言いたげな顔だ。

「なんだ、おまえ？ ダミアンの女か？」

ジゼルは右の手の中にある鉄槌の感触をそつと確かめる。

「あたしは――」

つぶやきかける。半端に開いた口はそのままに、ジゼルはいきなり鉄槌を真ん中に立つ男に向かって投げつけた。

瞬間に、ジゼルは鉄槌を追いかけて駆け出す。とつさに上げた男の太い腕を鉄槌が叩いたが、ジゼルはそれを見ることもしない。燕のように床を低く走る。やみくもに振り回す男たちの腕の、さらにその下をすり抜ける。はためいた外套が男の手に軽く触れたが、す

んでのところで指から逃れた。

扉をくぐり、廊下を飛ぶように抜けていく。

「待たねえか！ この女」

怒号が背中から聞こえた。くぐもった声がいかにも遠い。なんとか逃げ切れる。ジゼルはそう思いながら、暗がりの中を必死で走った。

廊下の先、通りの白い光がみるみる近づく。水の中に飛び込むような気持ちで、門の外へと身を躍らせた。

ジゼルの周りが光に塗りつぶされた。薄闇から飛び出した目が白昼に慣れるまで、時間にすればほんの少しだったに違いない。だがその短い間に、ジゼルの運が暗転した。

肩のあたりに何かがぶつかった。小さな悲鳴が耳元をかすめる。通りを歩いていた誰かにぶつかったのだと気づいた時には、すでにジゼルの体は均衡を失っていた。倒れ込む体に足がついていかない。こらえきれずに背中から地面に転がる。天頂近くにあつた太陽がくるりと回り、ジゼルの目をさらに灼いた。

「押さえ込め、早く」

「逃がすな」

迫ってくる男どもの声が、枷を繋ぐ鎖の音に似て聞こえた。立ち上がるうにも、どっちが上か分からない。ジゼルは唇の間から絶望のうめきをもらした。

男たちに外套を力任せに引つかまれて、乱暴に引き起こされた。「生っ白いダミアンの女にしちゃ、すばしっこい女狐だ。あいつは大金を隠し持ってるはずだ。どこにある？」

「黙り込もうってんなら、それなりの扱いをさせてもらうぜ。いいか、女！」

ごつごつした手が外套の胸ぐらを締め上げる。通りを歩いていた人々は騒動を遠巻きにして眺めるだけで、誰もジゼルを助けようとはしない。あの屋台の店主も、二人組の荒っぽいやり口を恐れて立ち尽くしていた。

「……間抜けどもが、あたしは、ダミアンの女なんかじゃ、ない」
苦しい喉からなんとかそれだけ絞り出す。荒くれ相手に下手に出たら終わりだ。そう思い定めて、ジゼルは胸の内で暴れそうな鼓動を抑え込んだ。

途端に男どもが色めき立つ。

「てめえ、舐めた口きいてんじゃねえ」

「辛気臭え女だ。顔を見せろ」

深く被ったジゼルのフードに手がかかる。外套そのものをはぎ取らんばかりに、力ずくで取り払われた。叫び声をあげそうになるのを、ジゼルは懸命にこらえる。殴られるのはまた違った恐怖に身体が硬くなっていた。

琥珀の髪が乱れて、むき出しにされた。脱ぎ捨てられた服のように崩れた髪を、日の光が照らした。同時に、左頬の炎の入れ墨も露わになる。

一瞬、男どもが気を吞まれた。

わずかに恐怖の色が浮き出ていたジゼルの白い顔は、真紅の刻印のおかげで見事に作り替わっていた。右半面がなまじ愛嬌を持った顔つきだけに、炎を映し込んだような半面がいつそう禍々しい。信仰の篤い者であれば、悪魔や地獄を連想するかもしれない。

男どもが動きを止めたことで、ジゼルはいくらか平静を取り戻した。

「……あたしは金貸しのジゼル。ダミアンはあたしの畑なんだよ。あんたら、あたしの畑に手をつ突っ込むつもりか」

意識して低い声を作り出す。男どもは黙り込んだままだ。じっとジゼルの左頬を見つめる。

ジゼルの胸ぐらを締め上げていた男が、口を開きかける。

突如、男が悲鳴をあげた。

どこからともなく飛来した石塊が胸ぐらをつかんでいた手首を打ったのだ。男が顔を歪めながら、外套をつかんでいた手を放した。

「ジゼルさん！」

礫の主はリュカだった。二十歩ほど離れた所で、さらに石を構える。今日も青物市場で買い出しをしていたのか、足下には放り出した野菜が転がっていた。

リュカが続けざまに石を投げる。狙いを外さず目元に命中し、たまらず男は片膝を地についた。

拘束から解き放たれて、ジゼルは胸の内だけで安堵する。入れ墨された左頬はゆるめることなく、より険しく男どもをにらみつけた。「あたしはダミアンに大金を貸してるんだ。あんたらの出る幕じゃない。ダミアンの血を吸うのは、あたしだ。あいつにはせいぜい稼いでもらって、たつぷりと貸し金の『お礼』を払って貰わないと困るんだよ」

たった銀貨二十枚ぼちだけどね、とジゼルは心の中で舌を出す。「ふざけんな、おれたちは……」

「あたしの稼ぎを横から食おうって腹か！」

ジゼルが声を張り上げる。殺気立つような表情の中で赤い入れ墨も歪み、まるで燃え盛る本物の炎のようだ。

「いいか、ダミアンに少しでもちよっかいを出したら、貸し金はあんたらにかぶってもらうからな。金が無いなんてしみつたれたこと言うなら、とっておきの仕事を紹介してやるよ。あたしの知り合いに性根のねじ曲がった貴族がいてさ、そいつは若い男の手足を斬り飛ばして悶え苦しむのを見ながら酒を飲むのが大好きな変態野郎だ。あんたらみたいな活きの良い男なら、たいそうな高値を付けてくれるだろうよ」

ジゼルが口の端を吊り上げて、笑ってみせる。脅し文句とはいえ、このときのジゼルの言葉の悪辣さは、頬の入れ墨のそれをわずかに上回っていたかもしれない。気を吞まれた男たちが、そつと目を見合わせる。

無傷だった男が自らを鼓舞するように叫び声をあげた。最後に頼れるのは腕つぶし、とでもいうようにジゼルにつかみかかる。

だが二歩も踏み出したところで、再び鈍い音が通りに響いた。ジ

ゼルに手が伸びるよりも早く、リュカの礫が男の頬骨を打ったのだ。足をふらつかせた男の顎へさらに礫が飛ぶ。リュカの狙いは驚くほど正確で、放った礫をことごとく命中させてみせた。

後ろにいた男がそろりと足を退くと、あとは早いものだ。男どもはさつと背を向けてどこかへと逃げていった。姿が見えなくなつてから、ゼルはようやく肩の力を抜いた。

リュカが駆け寄ってくる足音が聞こえる。少年らしい軽やかな音だったけれど、ゼルにはこの上もなく頼もしく聞こえるのだった。ゼルが振り返る。その顔に、柄にもなく娘らしい微笑みが浮かんでいた。

「その、何て言ったらいいんだろうな、つまり……そう、今日は天気が良くなってな。客の入りがいま一つだったんだ。それで、その……金が、さ」

男の落ち着き無く泳いだ。ゼルをちらりと見たかと思うと、蠟燭の揺れる炎や騒がしい店内へと目をそらす。酔客の笑い声があふれる中で一人、体を小さく縮こまらせている姿を見て、ゼルは笑い出してしまいそうになった。

まったく、夜の居酒屋で何をかしまっているのやら。

込み上げてくるおかしさを鉄面皮で覆い隠して、ゼルは静かに男を見返した。

「いや、もちろん借りた金は返せるんだ。勘違いしないでほしい。少々の家財を売り払ってでも、金は作ってくる。だから、な……あんまり物騒なことは」

男が額に浮かべて汗をぬぐった。またゼルの方を盗み見て、「その、つまり」と慎重に言葉を選んでいる。

まるで毒蛇でも扱うような怯えようだ。ここ数日のうちに、こんなふうにゼルをやけに恐れる貸し客が目に見えて増えた。二人組

の男との一悶着の様子が客の間で知れ渡っているらしい。返済が遅れると家畜みたいに売られて体を切り刻まれると、半ば本気で信じているようだった。

ジゼルには言うべき言葉が見つからない。客が勝手に想像を膨らませて、勝手に怯えてきつちり返済してくれるのなら、金貸しとしては好ましくはある。

「つまり、あんたが言いたいのは『今日はパンの売り上げが悪かった』、『貸し金を返すだけの持ち合わせが手元に無い』、そういうことか」

わざとぶっきらぼうに言うと、男は心なし顔を青くした。肯定とも否定ともつかないつぶやきを口の中でもごもご繰り返している。

ジゼルが小さくため息をつく。この分だと、街区で誰か行方不明になるうものならすぐにジゼルの仕業にされそうだ。

「明日でいい」

「え？」

「金の無い奴に金を作らせるのは骨が折れるんだよ。そんなことより、明日の商売の準備でもしろよ。夕焼けがきれいに見えたから、明日は晴れるだろ」

「あ、ありがたい！」

男の顔がぱつと輝く。嬉しげに笑いかける中年男の顔なんて、あまりぞつとしない。ジゼルは気持ちだけありがたく受け取っておいた。

男は跳ぶように居酒屋を出て行った。ジゼルの座る居酒屋の店内が、毒蛇の巣にでもみえるのだろうか。

舌打ちを一つ。ジゼルは木杯のエールをあおる。

不満を持つような理由があるわけじゃない。強面の金貸しとして通っていれば、黙って座っていても貸し金は帰ってくる。

あの三人組もジゼルの脅しを恐れて、あれ以来ダミアンの前には姿を現わさないようだ。ダミアンも荷揚げ所でまじめに働いているらしい。ノエミとのことは……、それはもとよりジゼルにはあま

り関わり合いのないことだ。

渴きを癒やすようにエールを飲み下す。空に近くなった杯を目聡く見つけ、リュカがすぐに注ぎ足した。

「ありがとう」

ジゼルはエールを注ぐ手つきをぼんやりと眺めた。リュカの腕は少年らしく引き締まって細い。この腕があの日、鞭のようにしなつて石を飛ばした。たった数日前の出来事なのに、ジゼルは夢を思い出すような朧気な感じがした。

「あんたの礫、すごかったね。良い腕前してるよ。ガキの頃はさぞかし暴れ回ったんじゃないの？」

あの時、ジゼルと男が揉み合っているのを見て、リュカは少しも迷うことなく石を放った。わずかでも狙いをそれるとジゼルに当たるかもしれない。投石の技にかなりの自信を持っているのだろう。

リュカは照れたように曖昧にうなずいただけだった。

「あの、ジゼルさん」

「何？」

「ジゼルさんは、その、借金を返せない人を貴族に売ったりするんですか？」

ためらいがちにこぼれた言葉に、ジゼルは崩れ落ちそうになる。

（あんたまでそんなこと言うか）

ジゼルは自嘲気味に笑おうとして、途中でやめた。

何気ない問いかけにしては、リュカの目がばかに真剣な光を帯びていたのだ。

少し脅かしてやろうかと開いた口も、ジゼルは力無く閉じてしまった。ふて腐れたように頼杖を突く。

「さあてね。グルジュの城壁の中は広いんだ。がんばって探せば変態貴族の一人ぐらい、見つかるかもしれない。もつとも、あたしはそんなアホらしいことは御免だけだね」

おどけたように言うと、リュカの目から硬い光が消えた。顔立ち

もいつもの優しげなものに戻っている。

少し不用心だったかな、とジゼルは唇を結んだ。本心を簡単に明かしてしまうのは、金貸しとしてはいかにも安い。他人に嫌われて怖がられて、それでようやく金貸しは仕事ができるのだ。

そう思うものの、心の中にはまた違った気持ちがあるような気がする。例えば、リュカの穏やかな顔が曇ることを恐れるような、そんな心境だ。

「……馬鹿馬鹿しい」

誰にも聞こえないようにつぶやく。自分が怖がる側に回ってどうするんだ。

ジゼルはまた杯に口をつける。だが口に含んだエールは妙に苦くて、なかなか飲み込めなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2138n/>

悪しき銭、苦く闘いて

2010年10月8日13時57分発行